

Journal of Chubu University Education

No. 20
2020

【実践研究・実践報告】

コロナ禍下の文系学部による遠隔授業講習会

－国際関係学部2020年春学期奮闘記－ 中山紀子・大澤 肇

【Practical Reports】

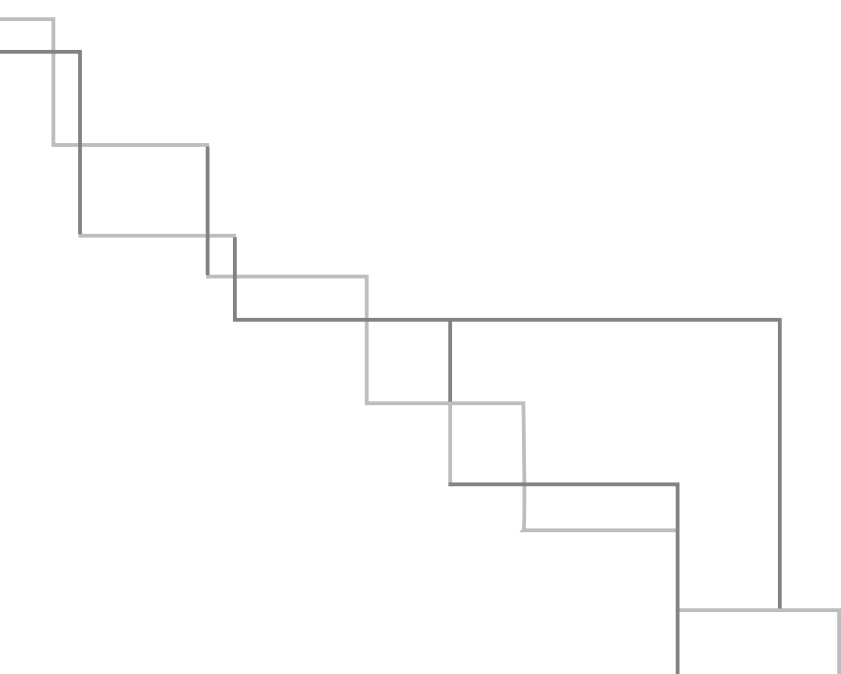
Progressing to the Next Stage in University Remote Teaching

Under COVID-19 Pandemic Conditions:

Challenges faced and met by the College of International Studies,

Spring semester 2020

..... NAKAYAMA Noriko and OSAWA Hajime



コロナ禍下の文系学部による遠隔授業講習会

－国際関係学部2020年春学期奮闘記－

中山 紀子^{*1}・大澤 肇^{*2}

要 旨

2020年春学期コロナ禍のなか、我々国際関係学部教員はほぼ毎週水曜日に15回の遠隔授業講習会を開いた。講習会は学部教員自身によって行われた。CoursePower、Zoom、Google Classroom、Drop-boxについて教える教員もいたし、また自分の授業資料を紹介する教員もいた。我々はお互いに助け合い、遠隔授業についての情報を共有し合い、この困難な時期を何とか乗り切った。本稿は急遽コロナに見舞われた我々の奮闘記である。中山紀子が講習会の概要と内容を紹介し、大澤肇が学部の各教員の遠隔授業のまとめを紹介する。

キーワード

コロナ禍、遠隔授業、国際関係学部、奮闘記

1 はじめに

「これまでに経験したことのない」「特別な」学期がようやく終わった。2020年春学期はコロナ感染症予防のため、急遽すべての授業が遠隔授業となった。遠隔授業をどのようにすればいいのか、遠隔授業とは何か、これまでの授業資料は遠隔授業のなかでどう使えるのか、わからないことだらけだった。何よりも、何をどうすればいいのかについてどこで誰と話し合えばいいのか皆目見当つかず、不安でいっぱいだった。パソコンに強い人であればネットから情報を探して自力で学ぶことができたであろう。しかし、私はようやくワードや簡単なパワーポイントを作る程度の能力しかなく、これから遠隔授業において主流になるとされたCoursePowerもまったく使ったことがないという情報弱者であった。文系学部である国際関係学部には私ほどではなくても、遠隔授業に困っている人は他にもいるのではないかと、だれにも相談できない人があるのではないかと思い至り、相談する機会をつくりたいと考えた。また、その機会を企画するのが私のような情報弱者であることはむしろよいことのように思えた。私には遠隔授業について何も教える力はないが、困っている人と教えてくれる人をつなぐことはできるのではないかと、私自身が何より困っている当事者なのはこの企画により切実に向き合うことにつながるのではないかと。このように思えたのは国際関係学部の同僚ならきっと助けてくれるだろうという信頼感があったから

でもある。こうして学部教員の協力のもとほぼ毎週水曜日午後に遠隔授業講習会を15回開催することができた。

本稿は、文系学部である国際関係学部が未曾有の危機であるコロナ禍のなか、初めての遠隔授業実施に際し、お互いをどのように助け合ってきたのか、いかに奮闘してきたかの記録である。15回の遠隔授業講習会の経緯や内容のほか、メールでの情報共有を具体的に紹介したい。ただ、講習内容については情報強者の読者には既知のことも多いと思われるため、講習内容の具体例よりも講習会の流れに重きをおきたい。情報弱者によるコロナ禍下における奮闘の民族誌（エスノグラフィー）という位置づけである。臨場感を持たせるためやや冗長な記述となるが、「神は細部に宿る」をモットーとする私の学風に免じて容赦していただきたい。なお、本稿は講習会の呼びかけ役をした中山と、講習会に毎回参加し、情報強者としての能力を遺憾なく発揮して迷える同僚たちを指導していただいた大澤肇先生の共著とする。大澤先生には、本稿の3「国際関係学部教員による春学期のまとめ」を執筆していただき、第13回講習会に参加した学部教員のそれぞれの遠隔授業の総括を紹介していただいた。

2 遠隔授業講習会の講習内容

第1回遠隔授業講習会は4月15日（水）午後に行われた。講習会の開催は、1週間前の4月8日（水）に

*1 国際関係学部 国際学科 教授

*2 国際関係学部 国際学科 准教授

学部執行部（高英求学部長、中山紀子副学部長、澁谷鎮明学部長補佐、中野智章学科主任、和田知久学科主任補佐、大澤肇学科主任補佐）が行った主任会議の席上で決定していた。4月7日（火）には政府が緊急事態宣言を出していたが、愛知県は対象区域から外れていた。しかし、県内の感染状況から4月10日（金）に愛知県が独自に愛知県緊急事態宣言を発出し、それを受けて4月15日（水）に通常通り行われるはずだった教授会が急遽メール審議となった。ただし、遠隔授業について教員が話し合うことは喫緊の課題と認識されたため、「教授会は中止、講習会は実施、ただし出席は任意」という条件下で講習会を開くことにした。高学部長から以下のようなメールで学部教員に知らされた。

●遠隔授業の講習会は実施

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：4月15日（水） 14時00分～
- ・場所：1023教室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用 [ない方はご相談を]）
- ・内容：CoursePowerの使い方 その他

講習会の内容は、高学部長がよく主張されていた通り「すぐにはできなくても、“こんなことができる”という知識を共有できるとよい」という方向でいくことになった。第1回は高先生によるCoursePowerの説明と大澤先生によるYouTube作成の紹介であった。所属教員のほぼ3分の2が参加していた。参加者の希望により、講習会を今後も引き続き行うこととなった。

なお、講習会の前日14日に、大澤先生から、「今朝、大学のホームページに、「【新入生の皆さん】授業受講の準備（「Tora-Net Portal」のログイン方法）について」^{注1)}が掲載され、その中に「Tora-Net（トラネット）、メールシステム、CoursePower（コースパワー）の使い方とMicrosoft Officeのインストールの方法」のリンク^{注2)}がはってある」という情報があった。まだ、大学がどのような情報を出してくるのかということ自体が重要なニュースであった。また、澁谷先生からは、名古屋大学教養教育院のサイトの中にある「オンライン授業に初めて関わる教員のための教授法（ティップス）」「新型コロナウイルス感染症への対応について：名古屋大学教養教育院」^{注3)}、「特別講義「大学生活入門」（新入生向け）の中止について」などの有用なサイトの紹介があった。ほかにも中野先生からは立命館大学の遠隔授業の状況を知らせるサイトの紹介があり、国際関係学部事務室からも滋賀大学など他大学の状況の紹介があった。それこそ誰もが遠隔授業について学内外の情報をできるだけ共有しようと手

探りながら努力していた。

第2回遠隔授業の講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：4月22日（水）14時00分～
- ・場所：1023教室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：黄強先生の地域研究入門「中国地域」の授業資料紹介
「国際専門演習A」授業準備状況（伊藤正晃先生）
ナレーション付きパワーポイント作成（宗婷婷先生）
Zoomの参加方法（和田先生）

第2回以降私が講習会の呼びかけをすることになった。第2回は伊藤正晃先生から遠隔授業準備について、また、宗婷婷先生からナレーション付きのパワーポイントについて説明をしてもらった。このころ、CoursePowerだけでなく、Zoomというオンライン会議ができる技術も習得する必要があるとわかり始めてきた。そのため、主任会議でZoomについて発言していた和田先生に第2回講習会前日に明日の講習会でZoomの説明をしてもらえないかと依頼した。無茶ぶりだったが「承知いたしました。ともにさまよえる羊の一人としてであれば参加可能です」という快諾？の返事をもらった。当日和田先生は「Zoomには実は2日前に初めて触れたばかりです」と言いながら見事なプレゼンを行ってくれた。

なお、このころ高等教育推進課から全学的に「CoursePower等を活用した遠隔授業方法と実践例の講習会」が開かれたので4月22日（水）午前中の回に参加してみた。わかりやすい説明ではあったが、ひとつづつまずくについていけず、また大勢の知らない参加者がいたためなかなか質問はしづらかった。ただこの講習会の後に大学IR推進課からGoogleドライブに関する資料をもらえたのは分からないながらも嬉しかった。同じ回河内信幸先生も参加されていて不安な者同士だと親近感を強く覚えた。

4月18日（土）に澁谷先生から、オムニバス授業である地域研究入門の担当回の「ローテクな授業案」（本人談）が送られてきたので、許可をもらって学部教員にメールで共有した（資料1参照）。ローテクというのは、「動画なし、YouTubeなし、音声なし」ということだが、内容は充実しており、何より初めて具体的な授業案を見ることができて一筋の光明をみた思いだった。私はこれに味をしめて、すでにCoursePowerに地域研究入門「中国地域」の授業資料をあげ

ていた黄強先生にお願いして、資料を紹介する許可をもらった。

また、このころ、教務支援課より、各学科からICTに関する「学生・教員に対するサポート教員」を選出するように通知がきたが、国際関係学部では、中野学科主任、和田学科主任補佐、大澤学科主任補佐の名前を伝え、「実際には、いま行っている講習会のように皆さんで知恵を出し合い、助け合って」（中野先生談）いくことになった。実際にこの3人以外でもたとえば伊藤正晃先生などに個人的に質問することができた。そういう助け合いの雰囲気が生まれていた。さらに、せっかく講習会には何人かの先生が集まるのだからと、学部の中期的な課題、すなわち、課題を出しすぎないこと、通常の対応で成績評価を考えないことなどを伝える機会にもなった。

4月24日（金）には、英語教育のとりまとめをしている伊藤裕子先生から、国際英語の非常勤講師向けの遠隔授業勉強会開催の要否について質問があり、実際に国際学科の中国語科目を担当されている非常勤講師の先生方（3名）と打合会を開いた和田先生に答えてもらうということもあった。

第3回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：4月30日（木）14時00分～
- ・場所：1023教室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：SharePoint等Tora-Netメールの使い方（高先生、大澤先生）
初級者用CoursePower講習（高先生）
各自の遠隔授業の紹介

通常の講習会開催日の水曜日が29日で祝日のため、日にちを1日ずらして行った。講習内容についてであるが、前回の第2回の講習会は初心者からするとレベルが高すぎたという意見が高学部長に寄せられ、第3回では「初心者に特化したCoursePower講習」のクラスを一つつくり、そこで手取り足取り、ゆっくりやることになった。情報弱者のわりにはうかつであったと少し恥ずかしい。初級クラス開講のことを、まさに「雪中送炭」と于小薇先生は表現した。講習会の後半は初級クラス（講師は高先生）とその他に分かれた。

また、この授業開始1週間前というぎりぎりの時期になってCoursePowerがパンクしそうだという状況が判明した。高学部長から、4月28日（火）の大学からのメール「（重要）ICTを利用した遠隔講義に関するお願い」に「CoursePowerを介在しない教材配布および課題回答提出を」とあり、「（できれば）Course

Powerを使わないで」と言っているようだとのメールが回った。そのためTora-Netメールでの授業資料配布の重要性が浮上し、第3回講習会では急速Tora-Netメールの使い方を伝授することになった。とくに私はTora-Netメールで課題管理をするためのソーティング方法を知りたかった。講師はまたもや高学部長であった。ほかにも忙しいなか申し訳なかったが高先生は頼もしかった。しかし、こうした技術はすでに知っている参加者も多く、今後の講習会の運営方法を考えざるをえなかったが良案も思いつかなかった。またCoursePowerの代わりに工学部の厚意で「Google Suite for Education」が使えるようになるかもという朗報があったが、情報弱者にとってはこれ以上新しい技術を学ぶことは難しいように思われた。工学部の武藤敬先生が開いてくださる「Google Suite for Education」説明会には大澤先生が参加してくれることになった。

いっぽうで、授業内容紹介の要請にメールで応じてくれた先生が複数いた。4月29日（水）メールで送られてきた岩間優希先生の「社会学入門」は、学生の読解力とITスキル、データ通信にかかる負荷等を総合的に考慮し、「文字による解説入りのパワーポイントスライドをCoursePowerにアップ」という方法をとっていた（のちに大学側から容量の都合上CoursePowerの利用を控えるよう通知があったため、Tora-netメールでの配布・課題受領に変更）（資料2参照）。内容もさることながら、パワーポイントの見方を知らない新入生に対し丁寧にスクロールに導く技術に感嘆した。CoursePowerへの課題のアップ方法のスライドとともに、すぐに自分の授業にも使いたいと申し出て快諾してもらった。岩間先生に触発されてか、河内先生が「北米から学ぶ」（資料3参照）、伊藤裕子先生がBlackboard Learnに誘導する「国際英語A」（資料4参照）、平井芽阿里先生が全学共通科目の「生活環境と人間」の授業資料を送ってくれた。

第4回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：5月5日（水）15時30分～
- ・場所：1023教室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：SharePointのメール振り分け（高先生）
Google Suiteについて、実践的な報告（大澤先生）
各自の遠隔授業の紹介、その他

第4回はまず、高先生にSharePointのメール振り分けを学んで、CoursePowerが使えない場合の学生

管理に備えた。次に、Google Suiteについて大澤先生から説明してもらった。和田先生と平井先生が学生役となってくれていた。参加者は実際に自分のGoogle Suiteのアカウントをとるところから教えてもらった。CoursePowerを使うとしてもダウンロードしてしまわないように、学籍番号の奇数偶数で使う日を分けるなど運用が複雑になり、とはいえTora-Netメールで大人数講義を管理するのは大変なので、Google Suiteを学んでこれを使ったほうがいいようだった。

大澤先生は、私も参加教員のひとりである授業「ハイブリッド・プロジェクトB」のまとめ役であり、その授業を、Google Classroomを通じた課題作成と提出・閲覧、およびテレビ会議システムを使ったリアルタイム授業をミックスして進行する計画を立てていた。加えて、連絡網としてLINEも使っていた。スタートアップセミナー（1年）や国際応用演習A（2年）や専門演習（3年）などの少人数ゼミにZoomなどのテレビ会議システムを使うことになる教員は多く、Google Meetの設定を知っておくほうがよかった。

第5回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：5月13日（水）15時30分～
- ・場所：924教室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：音声データの作成（平井芽阿里先生、伊藤正晃先生）
Google Suiteの説明（大澤先生、高先生）

5月7日（木）から授業が始まったので、第5回は開始時間を15時30分に変更した。また、これまで使っていた10号館の建物はWi-Fi環境のない学生が来学して使用することになったので、場所を924教室に変更した。第5回にはメールで音声データの作成について情報を送ってくれていた平井先生と伊藤正晃先生から授業紹介をしていただいた。

第5回講習会前日の5月12日（火）に平井先生からメールをいただいた。平井先生は、以前に紹介してくれた全学共通の「生活環境と人間」という授業を、その後、音声データとスライドをPDFにした資料で授業を試みた。その際に、学生から「通常の授業を受けているみたい」という喜んだ声が多かったため、より多くの教員が音声データ付き資料を作成できるように「ギガに優しい」音声データの作成方法があるサイトを共有してくれた。なお、Windowsの場合にはサイトにある無料アプリ「Audacity」の使い方がわかるサイト^{注5)}が参考になるそうだ。当時ほとんどの学生が少人数演習でリアルタイム授業を受ける以外は、

送られてきた資料を読んで課題を考える通信教育のような状況にあった。教員は慣れない遠隔授業の資料を作成するだけで四苦八苦しているが、受講する学生も同じく苦勞している。味気ない通信教育をせめて音声データ付きにする必要性を強く感じた。学生にとって「通常の授業」に近い平井先生の授業形態を学んでおけば、今学期はオンデマンド授業でしのいでも、今後第2波が来る可能性のある秋学期に備えられるからである。また、Zoomを使う際の「入室後の設定」というPDF、日本文化人類学会が提供している「Zoom利用基本マニュアル」のファイルも添付していただいた。同じく音声データの作成方法として、伊藤正晃先生からYouTubeで中国語の授業を作成されたものを紹介していただいた。第5回講習会は音声データ付きの資料を作成する方法を学ぶ回となった。

その後、大澤先生と高先生より、前回よりさらに詳しいGoogle Suite（とくにGoogle Classroom）の説明が行われた。講習会に先立って、大澤先生が5月9日（土）のメールで、工学部作成のマニュアルを学部教員に回してくれた。マニュアルを読んだうえで講習会に臨んでほしいとあった。それは、以下の4つ、Google Classroomの使い方^{注6)}、講義クラスの作り方^{注7)}、Google Suite for Educationの初期設定方法^{注8)}、Black Boardのなかの「教員専用【遠隔授業】情報交換掲示板」^{注9)}であった。

Google Suiteを学ぶことの難しい情報弱者の教員がCoursePowerを使えるようにするために、高先生があえてGoogle Suiteに移ってくれたが、何人かの学生がどうしてもGoogle Suiteに参加できないらしい。この問題は大きく、まだすべて解決したとは言えない。高先生自身の対処策は次の5つ、1. 宇宙航空理工学科のホームページの「step1」を確実にやらせる、2. 日本語入力／英語入力、大文字／小文字などの注意、3. クラスコードをコピー＆ペーストで入力させる（間違いがないように）、4. Tora-NetのID・PWと、Google Classroomのアカウント・PW、クラスコードを混同しない、5. Google Chromeを使わせるであった。後に、大澤先生から、もうひとつの原因として、学生がすでにもっているGoogleのアカウントから入ったため大学のGoogleに参加できないのではないかと追加の情報を得た。

5月17日（日）のメールで学部全教員に宛てて大澤先生がご自身で作成された動画を2つ教えてくれた。Google Classroom上でのファイルのアップの仕方についての動画と、ファイルを授業などで学生と安全にシェアする（たとえば、複数の自己紹介やプレゼンなどをまとめて特定の場所にアップロードし、学生はそれをあらかじめ見て授業に臨む／感想を書く）方法に

ついで動画である。なお、YouTubeの限定公開サービスを使って拡散を防ぐため、教えていただいたURLはここでは載せないことにする。

平井先生の授業資料に触発されて、私もとくに評判がいいわけでも自信作であるわけでもないが、自分の「文化人類学入門第1回」の授業資料（資料5参照）をメールで送った。送る際に私が書いた「お恥ずかしいですが、次に自分の授業の紹介をしてくれる人がいることを願って、たたき台としてお送りしています」という言葉に回答してくれたと思われるが、中野先生も「考古学第1回」の授業資料の一部を送ってくれて嬉しかった。

第6回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：5月20日（水）15時30分～
- ・場所：925教室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：具体的な質問への答え（大澤先生）、その他

前回の924教室は机にコンセントがなかったのも、第6回の場所は925教室に変更した。第6回は、CoursePowerやGoogle ClassroomやZoomなどについての具体的な質問を大澤先生に答えていただいた。実際に困っていることを質問できて好評だった。

第7回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：5月27日（水）15時30分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：Google ClassroomやCoursePowerなどに関する質疑、授業紹介など

第7回から場所を20号館12階大会議室に変更した。人数が落ち着いてきて大講義室を使う必要はなくなり、参加しやすい場所で行うことにした。第7回では、Google MeetやZoomなどのオンライン授業のやり方について具体的に大澤先生に教えてもらった。

第8回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：6月3日（水）15時30分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：送付資料の圧縮方法、その他具体的な質問、授業紹介など

第8回は、オンデマンド授業に必要な送付資料の圧縮方法などについて、大澤先生に教えていただいた。授業「地域研究入門」のメーワルト先生の担当回「南欧・中欧地域」の資料のサイズを12MBから半分にしてもらい、また和崎春日先生の担当回「東南アジア」の資料も16MBから9MBに減らしてもらった。また伊藤正晃先生にご自身のGoogle Classroomの実践を紹介していただいた。Zoomの音声がかきこえないとの質問がでたがそれも解決した。このように実際に困っていることを質問できるのは何よりだった。

講習会後（6月3日夕方）に大澤先生から、PDFのファイルサイズ縮小のやり方について「王道」の2つの方法が送られてきた。1）大学で契約しているAdobe包括ライセンスを利用し、Acrobat DCをダウンロードする方法^{注10}と2）Adobeの公式圧縮ツールを使う方法^{注11}の2つである。さらに、このメールをみた国際関係学部事務室（6月5日金）から補足説明として、大学で契約しているAdobe包括ライセンスを利用し、Acrobat DCをダウンロードするには申請する必要があることを教えてくれるメールが回った。

第9回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：6月10日（水）15時30分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：送付資料の圧縮方法、その他具体的な質問、授業紹介など

第9回では、オンデマンド授業に関するいくつかの試みや伊藤正晃先生のGoogle Classroomを使った先進的な取り組みの紹介、また補講についての意見交換などが行われた。パワーポイントに音声を入れたいなど個々の質問に関しても知識のある先生方に答えていただいた。

第10回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：6月17日（水）15時30分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：Drop-boxの使い方、具体的な質問、授業紹介など

第10回では、Drop-boxの使い方や音声の入れ方など個々の質問に関し知識のある大澤先生や伊藤正晃先生に答えていただいた。これは伊藤正晃先生が和崎先生から地域研究入門の担当回「アフリカ地域」の授業

資料作成補助を依頼されたことから始まった。伊藤先生は和崎先生の音声付きパワーポイントのデータをそのまま動画として作成できないかと努力してくれたのだが、和崎先生のデータが古いバージョンのパソコンで作成されたせいか、どうしても動画に変換できなかった。そのため、地域研究入門とりまとめ役の私に和崎先生のデータをDrop-boxにアップロードするので受け取ってほしいとのことだったが、私はそもそもDrop-boxとは何かを知らなかった。そこで講習会で教えていただくことになったのだった。伊藤先生はこうのようにみんなの相談所、駆け込み寺となってくれていた。

第11回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：6月24日（水）15時30分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：授業紹介（加々美康彦先生）

第11回は、加々美康彦先生にCoursePowerを使ったご自身の「国際法」や「環太平洋から学ぶ」などの授業内容を紹介していただいた。これは伊藤正晃先生からのリクエストだった。加々美先生は昨年度と同じ質でオンデマンド授業を行うというコンセプトのもと、そもそも素晴らしい内容とオンデマンドならではの工夫の両方を披露していただいた。熱心な学生にもまたそうでない学生にも双方に喜ばれる内容と工夫であった。

第12回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：7月1日（水）16時00分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：授業紹介（高先生）

第12回は、講習会前の主任会議が遅く始まるため、講習会の始まりを30分遅らせて4時からとした。講習内容は、急なお願いを聞いていただいて、高先生からGoogle Classroomを使ったご自身の「国際関係学入門」の授業内容を紹介していただいた。音声付きの資料が学生に好評なこと、熱心な学生には英語のオプション課題を出していること、基本的には課題を出しすぎないように注意していること、CoursePowerとGoogle Classroomの比較など、オンデマンド授業に関わる資料と工夫と実感と教訓などさまざまな内容であった。私もこの授業を受けたら賢くなれるのではと心から思

えた授業紹介であった。遠隔授業方法伝授にもまして、各教員の授業内容を知ること自体も重要だと認識できた。

第13回遠隔授業講習会と国際関係学部「懇話会」合同会

★出席は任意

- ・日時：7月15日（水）15時30分～（退出自由）
- ・場所：1011教室 分散して座る
- ・内容：成績評価、補講、授業に対する提案、学生の情報共有、その他
- ・参加スタイル：（下の二つのうちどちらか）
 - ①大学に来て出席〔マスク着用〕
 - ②自宅などからZoomで参加

第13回を行なう予定だった7月8日（水）は大雨のため中止・延期となった。第13回は翌週の7月15日（水）に、主任会議提案の国際関係学部「懇話会」と合同で行なった。Zoomでの参加もあり、いつにもまして盛況であった。参加された先生方から、現在の授業の状況、成績評価の方法、困っていることなどをお聞きした。まずは学生に不利益が出ないような対応をすること、さらに、音声付き授業の重要性やGoogle Classroomを学ぶことの必要性が確認された。秋学期の授業体制がどうなるかまだはっきりしていないが、おそらく遠隔授業が不要になることはなく、そのためこれまで行ってきた遠隔授業の（少しずつの）レベルアップが求められる。学生の満足度を高めるためにどうすればいいか、今後も検討することになった。この回の各学部教員の意見はのちの「3 国際関係学部教員による春学期のまとめ」において詳述する。

第14回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：7月29日（水）15時30分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：秋学期授業に向けてのアイデア交換、その他

7月22日（水）は、同時刻に中部大学国際人間学研究所主催第13回教員研究発表会が開かれ、平井先生（「現代沖縄の神々と聖地」）と岩間先生（「日本におけるヴェトナム戦争報道」）による発表があったため、講習会をお休みとした。

7月29日（水）に開かれた第14回講習会は、前回と同じく、Zoomでの参加も可能にした。内容は、秋学期の授業や成績評価に関する意見交換であった。その結果を踏まえて、次回は実際にパワーポイントに音声

をつける作業を伊藤正晃先生から教えてもらうことになった。

第15回遠隔授業講習会

★出席は任意（絶対に無理されませんように）

- ・日時：8月5日（水）15時30分～
- ・場所：20号館12階大会議室（窓を開けて間隔をあけて着席、マスク着用）
- ・内容：伊藤正晃先生による音声付パワーポイント作成指導、春学期成績評価検討

第15回は夏休み前の最後の講習会となった。伊藤先生の指導のもと、YouTubeを使って音声データをつけ、国際関係学部には何人かの新しいユーチューバーが生まれた。おそらく限定公開専門であろうが。

3 国際関係学部教員による春学期のまとめ

国際関係学部では、教員個々人の努力に加え、上記のような講習会を通して、IT知識や授業に関するチップスを共有することで、2020年度春学期におけるオンライン授業を乗り切ることができた。では、そのオンライン授業に対する教員個々人の方法・反省や、学生の反応、オンライン授業の総括はどのようなものであったのか。本来であれば、学生に対するアンケートなどで測るべきであったが、2020年度春学期における授業評価は中止になった。したがって、ここでは、7月15日（水）に開かれた懇話会（第13回遠隔授業講習会と合同）において、参加した学部教員が述べた春学期のまとめを紹介することで上記に代えたい。なお、執筆者の中山は司会、大澤は記録を取ることに専念したので、ここではまとまった発言はしていない。

まず1～2年生の状況を中心に紹介したい。

平井芽阿里先生は下記のように総括を行った。1年生は非常に頑張っており、こちらがメールを出せば返事はちゃんと返ってくる。よってスタートアップセミナーは良い成績になりそうである。問題は2年生で国際応用演習Aでは、時には半数くらいの学生しか出席してこなかった回があった。2年生のうち数名は、精神的に不安定な状況にあるように思われる。このような学生などはZoomのカメラをオンにしたがらないなどの行動が見られるので、注意する必要がある。また全学共通教育科目の授業も担当しているが、こちらの出席率は、73名中60名くらいと思われる。

岩間優希先生は、平井先生と同様、1年生の方が授業に真面目に取り組んでいるという評価であった。担当科目である、1年生のスタートアップセミナーと社会学入門について、学生はよくやっていると指摘した。

社会学入門は、毎回の感想を最大500文字で書かせて評価し、出席も取っている、規定回以上出さない場合は不合格になるが、昨年度以前に比べいいと思われると総括した。一方、2年生の国際応用演習Aの課題提出率はあまりよくないが、Zoomを通した面談などは出てくれるので、何とか脱落者が出ないようにしている、とのことであった。なお秋学期は、小規模な授業は対面も可能にして欲しい、との要望もあった。

伊藤正晃先生からは、スタートアップセミナーの担当クラスについては、過年度生以外は問題なく、Google Suiteでフォーマットを作って課題を出している、との報告があった。また学部専門科目の「音声学」が、Googleフォームを使い、授業全体で70問ほど課題を出したがほぼ全員出している、受講者の動向もフォローできている、との総括があった。

河内信幸先生からは、スタートアップセミナーの担当クラスについては、数名が課題を出せていない、ただし連絡は取れている、との報告があった。また1年生の学部専門科目「政治学概論」については、受講者168名で、課題が難しすぎるという意見があり、途中から課題の難易度を下げ、成績挽回のためのレポート課題も準備中との発言があった。2年生以上の専門科目「北米から学ぶ」では、一部学生の課題の提出があまりよくないときがあるが、こちらも成績挽回のためのレポート課題を準備中、音信不通の受講者については単位を基本的には認めないつもり、とのことであった。また4年生については、中間発表会ができていないこと、学生は対面授業推進派とオンライン派が半々で、進め方について困っている旨発言があった。

和田知久先生からは、1年生の学部専門科目「アジア研究入門」について、1割くらいの受講生は課題が出せていないので、課題の締切をお盆の前後くらいまでに延長することを考えている、との発言があった。また1年生の専門科目の担当者同士で情報を共有できればよいのでは、という提案があった。

2年生以上の学部専門科目については、以下のよう
な報告があった。

宗婷婷先生からは、2年生の国際応用演習A担当クラスは特に問題がない、学部専門科目の「東アジアから学ぶ」では、各回で課題を出しているが、最悪最後に課題を集めて出せばよい、ということも考慮している、との発言があった。

于小薇先生からは、学部専門科目の「比較社会論」は、CoursePowerを使い、受講学生が約70名、7回目を過ぎると課題提出を行う学生は50名くらいになった、との報告があった。あまり課題提出が少ない学生には電話して注意を促している、とのことであった。

黄強先生からは、講義もゼミも基本的にCourse Powerを使い、レポートを課していたとの報告があった。

羽後静子先生からは、3年生以上向け学部専門科目「国際政治学」について、優秀な学生と、ついていくのがやっとという学生と、受講者間で格差が著しいという報告があった。

澁谷鎮明先生からは、3～4年ゼミはZoomを使って実施している一方、100人規模の大講義2つについては、音声なしのスライドをGoogle Classroomを通じて配信している、との紹介があった。内容については特に学生からの苦情も無く、評価は普段より少し簡単にしているとのことであった。一方、韓国語の授業であるが、ネイティブ教員である姜先生はオンライン授業実施が困難であったため、全面的にサポートした。感染しないよう周回の準備を行ったうえで姜先生を大学にお呼びし、毎回Google Meetでリアルタイム授業を行うセッティングをしたため、実質2コマ増えたようなものである、との指摘があった。

本学部の教育の大きな柱である「国際英語」については、下記のような報告があった。

伊藤裕子先生は、レベル別に分かれている国際英語については、MeetとLINEを併用し行った。1年生のクラスは、中上級に相当するレベルであり、毎回ほぼ全員出席した。2年生のクラスでは、補講でこれまで出していない課題を出すことを認めるなど、例年に比べ比較的易しくした。一方、ネイティブ教員による国際英語クラスの一部では、メールが全て英文で書かれているために学生が理解できないという問題が発生したため、メールや課題を翻訳するなどサポートをした、とのことであった。また伊藤先生からは、直接電話をかけて受講者のサポートを行ったが、いわゆる通信教育的なやり方に魅力を感じられない学生もいる、という学生側の意見の紹介もあった。また非常勤講師のなかには、真面目にやりすぎてメールを送りすぎている先生もあり、そのため受講者がストレス・プレッシャーを受けている、という事例の紹介もあり、楽しみながらやらないとダメではないか、無理するとよくないのではないか、という指摘がなされた。

また伊藤先生の演習授業では、国際応用演習AはMeetとLINEを併用して実施し、数回は公開で行った。また4年ゼミについては、本来は、7月は卒論中間発表会を行っていたが、今回は通常通りできないので、秋学期にZoomで中間発表会をやってみてはどうか、という提案がなされた。

中野智章先生からは、担当の授業のうち1つは文法の授業だったので、電子メール等を通して英作文の提

出・添削を行った、他の英語2クラスはリアルタイムで実施し課題はほぼ全員提出した、との報告があった。

最後に学部長の高英求先生から総括が行われ、秋学期の授業方法については現在検討中だが、遠隔授業が行われる可能性が高い、学外からも中部大学はよくやっていると言われた、学生からよりよいオンライン授業をしてくれという声がある一方で、「データダイエットをするべき」という意見があるとの紹介があった。また、4年間の学びの集大成としての卒論(卒業研究)については、まだ就活ができていない・終わっていない学生も多く、課題に追われて論文が進んでいない学生も多い、彼・彼女らには心のケアが大事なのではないか、という問題提起が行われた。

4 おわりに

以上、前半に、15回の遠隔授業講習会の講習内容、およびメールによる情報共有について、後半に、遠隔授業に対する教員個々人の総括についてまとめた。前半の講習会については、15回も良く続いたと感慨深い一方、内容は思いつきや急な無茶振り、繰り返しが多いなど欠点だらけのように思えてくる。呼びかけ役の自分の授業準備が間に合わなくなり、講習内容も自転車操業となったかのようである。もっと実習に特化すべきだったかと反省している。参加者数も当初こそ多かったが、授業が始まると忙しくなったのか減少してきた。ただし、講習会と並行してメールでの情報共有があったため、参加者以外にも少しは役に立っただろう。講習会開催自体を「これこそFD」(和崎先生談)や「心のよすが」(高先生談)や「安否確認」(于先生談)と評価してくれる先生方もいた。あらためて急な依頼に応えてくれた講師陣、情報提供者に感謝する次第である。

後半の遠隔授業に対する教員個々人の総括については、何よりもまず各教員が遠隔授業に真摯に取り組んだことが理解される。春学期期間中ずっと、授業方法を工夫し、学生の反応をよく見ていた。とくに、平井先生や岩間先生をはじめとしてスタートアップセミナー担当の先生方は、もっとも不安を抱えている1年生に非常に密接に向き合っていたし、英語担当の伊藤裕子先生は毎週学生の電話相談にのっていた。ほかにもさまざまななかたちでそれぞれの先生が努力されていた。私が間近にみていた、執行部の面々はみな獅子奮迅の働きだった。とくに、学生や学部教員、また非常勤の先生方に向けて的確なメールを送り続けてサポートした高学部長や中野学科主任には頭がさがる。

本稿はたまたま遠隔授業講習会の呼びかけ役となった人間からみた講習会を中心とした国際関係学部の奮闘記である。おそらく他学部でも、また全国の大学で

もどこでも起こったコロナ禍下のドタバタ劇かもしれないが、私たちにとってはかけがえのない大事な記録であり、記憶である。小中学生にパソコンが1台ずつ配布される政策が決まった現在、いずれこの記録が日本のICT教育黎明期の貴重な報告として貢献できるかもしれない。また、お互いの授業内容を期せずして間近にみる機会となり、そのことは今後の新しい教育体制を考えるうえで重要なヒントになりうる。貴重な授業資料のアーカイブ化（伊藤正晃先生談）ができれば、教育や研究の新たな次元が開けるかもしれない。そうであってこそ、私たちがコロナ禍で奮闘した甲斐があったというものである。

注：

- 1) 【新入生の皆さん】授業受講の準備（「Tora-Net Portal」のログイン方法）について
<https://www.chubu.ac.jp/news/detail-3862.html>
- 2) Tora-Net（トラネット）、メールシステム、CoursePower（コースパワー）の使い方とMicrosoft Officeのインストールの方法
https://edu.isc.chubu.ac.jp/hsuzuki/iip/toranet_mail_faq/index.html
- 3) 「新型コロナウイルス感染症への対応について：名古屋大学教養教育院」
<http://www.ilas.nagoya-u.ac.jp/covid-19.html>
- 4) 「ギガに優しい」音声データの作成方法があるサイト
<https://www.gakushuin.ac.jp/~881791/RLtest/tips.html#mac>
- 5) windowsの場合の無料アプリ「Audacity」の使い方がわかるサイト

https://www-cc.gakushuin.ac.jp/~support/faq/quickmanual/shien_audacity.pdf

- 6) Google Classroomの使い方
https://www3.chubu.ac.jp/astronautics_aeronautics/aa_classroom/
- 7) Google Classroomの講義クラスの作り方
https://www3.chubu.ac.jp/astronautics_aeronautics/aa_classroom/class/
- 8) Google Suite for Educationの初期設定方法
https://www3.chubu.ac.jp/astronautics_aeronautics/aanotice/google_edu/
- 9) Black Boardのなかの「教員専用【遠隔授業】情報交換掲示板」
<https://chubu-univ.blackboard.com>
- 10) 大学で契約のAdobe包括ライセンスを利用し、Acrobat DCをダウンロードする方法
<https://www.isc.chubu.ac.jp/adobe/adobeinfo.html#adobe1>
- 11) Adobeの公式圧縮ツールを使う方法
<https://documentcloud.adobe.com/acrobat/jp/ja/online/compress-pdf>

資料

- 1) 澁谷先生の地域研究入門の担当回「東アジア」の授業案
- 2) 岩間先生の「社会学入門第1回」の授業資料の一部
- 3) 河内先生の「北米から学ぶ」の授業資料の一部
- 4) 伊藤裕子先生のBlackboard Learnに誘導する「国際英語A」
- 5) 中山紀子の「文化人類学入門第1回」の授業資料

【資料 1 - 1】

【授業説明・学習指示】

2020.05.21

地域研究入門（第3回）

受講生の皆さん、こんにちは。私は第3回担当者の辻谷（しふや）です。授業初回の日
に、科目リーダーの中山先生からアナウンスがあったと思いますが、この科目は遠隔教育
で行うことになります。教員もちろんですが、みなさんの努力も求められます。共に努
力してよい授業にできればと思います。

また、この科目は動画配信・ネット中継ではなく、みなさんが成績確認などで利用する Toranet 中の、Course Power などを用いて進めます。

今回は、私の専門研究地域である韓国（朝鮮）について、この①授業説明・学習指示書に沿って、②教科書『データブック オブ・ザ・ワールド 2020』、③配布資料「近くて遠い韓国・朝鮮」(PDF)、④パワーポイント画像データ (PDF) を使って学習を進めます。

これ以降、 に囲まれた内容が、皆さんに対する学習の指示なので、それに沿って学習を進めてください。

- ①Course Power からダウンロードした資料のうち、「近くて遠い韓国・朝鮮」というタイトルの入った PDF の文書が今日の学習内容です。図や表も参照しながら読み進めてください。わかりにくい用語があれば自分でチェックして調べてみてください。

- ②教科書の国別項目を探し、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国、日本の人口、面積、民族、言語、一人当たり GNI（国民総所得）を調べ、Course Power の「テスト」に回答してください。

- ③配布資料の図1にある、朝鮮戦争の経過についての歴史地図を見てください。開戦から停戦まで、どのような経過が起こったかを短い文章で説明してみてください。配布資料の文章の部分なども参考にして構いません。

- ④配布資料の「ハングル文字ということばの障壁？」と関連して、(1) 配布資料の図 2 にあるハングル文字と韓国語の特徴と、(2) パワーポイント画像データにある、韓国の街中の風景を見てどのくらい韓国語が使われているか確認してください。その上で、韓国語を学習することの意味について Course Power の「テスト」にコメントしてください。

【資料 1 - 2】

地域研究入門（担当：澁谷）

200514

配布資料:「近くて遠い」韓国・朝鮮と日本

●「朝鮮」「韓国」の呼称と基礎事項(テキスト参照)

- 日本の「朝鮮半島」に関する報道は日本では「大韓民国」と「朝鮮民主主義人民共和国＝北朝鮮」の二つの政府が存在する。韓国は土地地域として「朝鮮」半島と呼ばれるが、日本の報道などでは「朝鮮」等というときとイコール「北朝鮮」である場合も多いので注意すべきである。
- 良いたくすし懸念しているが、古くから朝鮮半島とは日本領が属し、朝鮮半島で起きたことは日本でも影響が及ぶ。たとえばかつてのNHK「ハングク講座」や「エンシェンシムニカ」のネーミングなどでも、両者に区別せずに「朝鮮語」とも「朝鮮語」とも表記しながらつてはでないから、もう「ハングク語」である。
- 教科書の◆ページと◆ページには南北朝鮮の基礎情報(人口・面積・民族・言語・略史など)が載っているのでも確認したい。

●朝鮮半島と南北分断

- 現在朝鮮半島は、同じ日本が分かれて別々の体制の政府を持つ「南北分断」の状態にある。大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の2つの政府があり、国連、双方の政府を認めている。両政府の間は関係がよいように見えても、互いに敵意をもちあっている。なぜこのようになるのだろうか？
- 基本的には朝鮮戦争の影響であり、韓国である日本にも美英は一定の影響がある。
- ・朝鮮戦争（1950-1953）とその影響
- 朝鮮戦争は日本と清韓の両国との争いではなくて、1950年6月に北朝鮮から38度線を越えて侵襲して開戦した。初期の北側の侵襲と、国連軍（米軍）の仁川上陸作戦の後、人民軍（中国軍）の参戦したことで戦線が南北半島大々移動して、半島全土がローグリー占領被害が増大した。旧日本軍による併合で1953年に軍事境界線（休戦ライン）を設定し休戦となった。
- 以後南北は対立して現在に至るもの、本来同じ民族であり人々が分断された状態である「民族統一」は現在でも重要な課題となっている。例えば朝鮮戦争とは差別にないか？「南北両敵国家」再発は懸念となっていて、韓国に米軍が多く駐留している事実や、韓国政府の南北融和策も本来朝鮮戦争による民族分断に原因がある。
- この時期に日本では軍事物資の生産し行い「朝鮮特需」等と呼ばれて好景気となり、日本の戦後復興の一助になったものとしていた。

●ハンゲル文字ということばの障壁(PPT資料)

- [illegible]

【資料 1 - 3】

- 韓国、朝鮮半島に関する参考図書・入門編(大学の図書館にもあり)

伊藤聖人は、『新訂増補 朝鮮を知る事典』、2000、平凡社、¥5000
小倉紀嗣編『現代韓国を知るための60章』、2014、明石書店 ¥2200
小野田南『韓流エンタメ日本侵略物語』、2011、扶桑社新書 ¥720
姜在彦『歴史物語 朝鮮半島』、2006、朝日選書 ¥1300
委田達『日韓交流スクラップ』、2008、大修館書店 ¥1800
NewsPicks 取材班『韓流経営 Line』、2016、扶桑社新書、¥780
伊藤聖人『半朝鮮民の生活：北朝鮮の手記から読み解く英知』、2017、弘文館、¥5000
李榮薫『反日植民主義』、2019、文春社、¥1760



図1 朝鮮戦争と国連軍(米軍)の参戦

【資料 1 - 4】

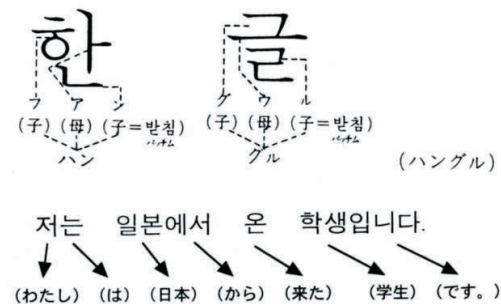


図2 ハングルの構成と朝鮮語（韓国語）の文法
上：ハングルの構成（出所：『10 日間のハングル』宝島社、
1984 年、35 頁）
下：朝鮮語（韓国語）と日本語の文法の対比
（筆者作成）

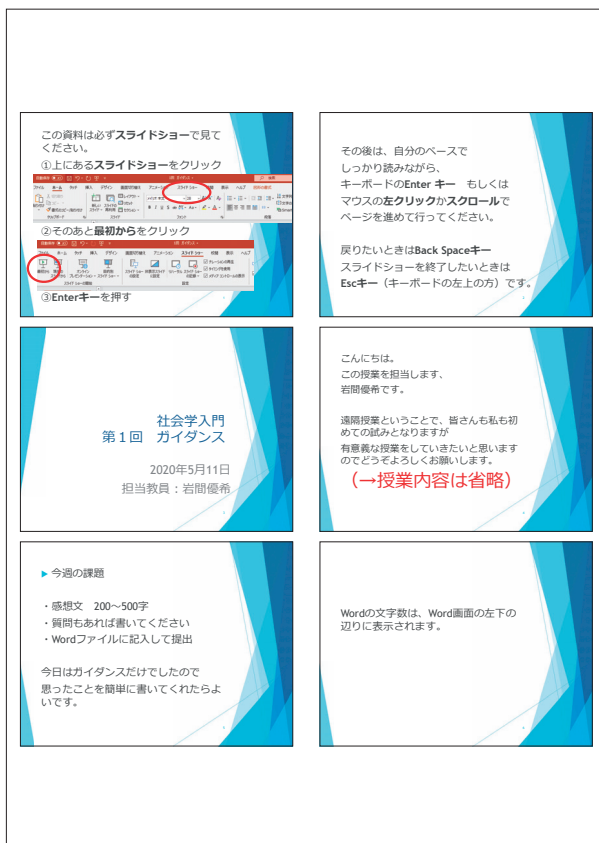
【資料1-5】



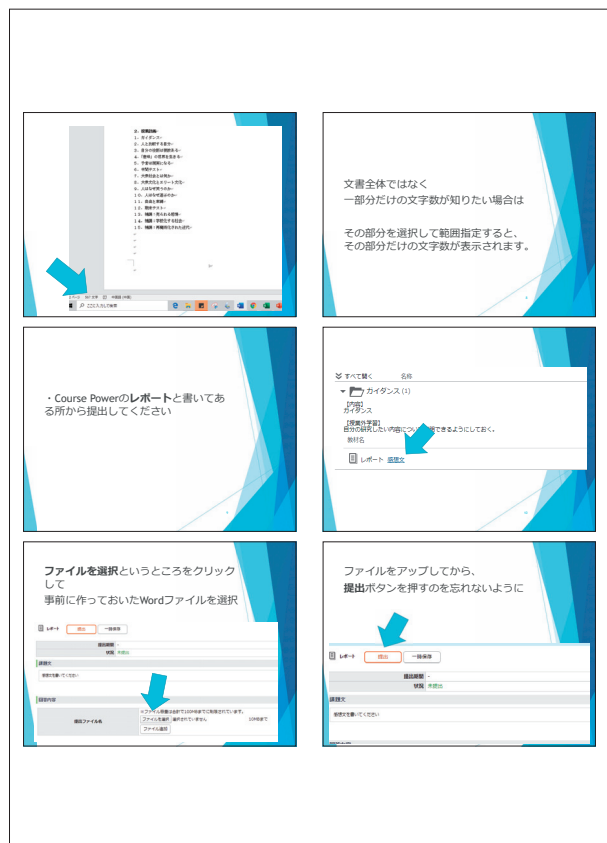
【資料1-6】



【資料2-1】



【資料2-2】



【資料 3】

授業説明・学習指示

2020. 05. 08

「北米から学ぶ」(第 1 回)

受講生の皆さん、こんにちは。私は「北米から学ぶ」を担当する河内です。授業は遠隔操作で行いますので、お送りする資料や指示に注意してほしいと思います。教員はもちろんですが、皆さんの努力も求められます。ともに努力してよい授業にできればと思います。

また、この科目は動画配信・ネット中継ではなく、皆さんが成績確認などでよく利用する Tora-net の中の、Course Power などを用いて進めます。

まず第 1 回目は、北米のカナダとアメリカ合衆国について、レジメ、地図、年表などの資料を送ります。まだ、教科書は入手できていない方も多いと思いますので、今回は、これらの資料に基づいて、次の点を留意してほしいと思います。そして、Course Power の「テスト」にコメントしてください。

＊留意点 (チェックポイント)

(1)カナダとアメリカ合衆国では、国土面積、経済 (国内総生産)、人口、人口密度において大きな違いがある。アメリカ合衆国は、人口の多さ、経済の大きさにおいてカナダを凌いでいますが、**レジメを参考**にして、その違いをチェックしてください。

(2)アメリカ合衆国は、元タイギリスの植民地でしたが、東部 13 州が独立して建国が始まりました。そして、次第に西部への開拓や南部への進出が進み、現在のアメリカ合衆国が形成されました。そのため、アメリカの歴史は短いですが、地域的な多様性に富んだ国であり、東部、中西部、西部、西海岸、南部などの地域に区分され、それぞれが特徴を持っています。**地図を参考**にして、その地域区分をチェックしてください。

(3)アメリカ合衆国は、1776 年にイギリスから独立して建国が始まりました。そして、19 世紀半ばには南北戦争という内戦を経て、19 世紀末にイギリスを超えて世界一の工業国になりました。また、20 世紀になると、第一次世界大戦後に債権国となり、第二次世界大戦では連合国勝利の重要な役割を果たしました。さらに、第二次大戦後は、ソ連と対抗する超大国となりました。**年表を参考**にして、アメリカ合衆国の歴史をチェックしてください。

【資料 4 - 1】

国際英語 1A (月曜 1-2 限レベル 5、担当教員：伊藤裕子) 資料 事前登録

事前登録 初回授業でも説明しますが事前に来る方は進めて下さい。

まずは、PC、タブレット、スマホを用意
Blackboard Learn 登録作業をします
①<https://chubu-univ.blackboard.com/> にアクセス
②Login ボタンの下の注意事項をよく読む。学生向けマニュアルをクリックしてよく読む。ここにも貼ります→学生向けマニュアル
<http://www.isc.chubu.ac.jp/elearning/gakusei.html>
③ログインページ <https://chubu-univ.blackboard.com/> からログインする。

ユーザー名とパスワードは、教務部より交付された利用
者個人認証です。入力後、「Login」をクリックしま
す。



【資料 4 - 2】

④ログイン後、利用者情報の登録を行います。登録の仕方のマニュアルサイト→
<http://www.isc.chubu.ac.jp/elearning/userset-gakusei.html>

このマニュアルをよく見ながら、自分の My Blackboard のページから利用者情報の登録を行ってください。ニックネームではなく、氏名を正確に記入して下さい。

⑤「戻る」を押して登録完了

①—④の登録作業をしなくても、ログインが可能であり、Blackboard Learn 授業サイト「国際英語 1A」を見ることが出来ますが、教員の方へは名前が通知されませんので、出席確認がすぐに出来ません。登録を行ってください。

分からない場合は、本メール返信で問い合わせてください。それでもわからない場合は電話で説明します。こちらから電話しますので、通じる電話番号をメールでお知らせください。すぐに電話できない事の方が多いですので、長くて 1 日待っててください。

【資料 5】

文化人類学入門 課題第 1 回

課題の締め切り：2020 年 5 月 11 日 (月) 23:00 pm
課題の提出先：Coursepower のレポートにアップロードが望ましい。その他はメール参照 (学籍番号偶数の場合：月、水、金、学籍番号奇数の場合：火、木、土)
課題の書き方：アンケート 2 つ、課題 2 つを同じ Word ファイルにまとめて提出する。

★アンケートが 2 つあります。
アンケート 1 文化という言葉がつく語句を、なるべく多く書いてください。
アンケート 2 文化人類学の授業ではどのようなことを学べると思いますか。

★課題が 2 つあります
課題 1 まず、下記の Ted Talk (15 分くらい) の youtube を見てください。その後、下記の 3 つの問いに答えてください。

なぜ AI 時代に人類的思考法を持った人材が必要なのか？ | Zhu Yi | TEDxOtemachiLive
<https://www.ted.com/talks/ai>

課題 1-1. この動画を見て、報告者が何を伝えたいのかを書きなさい。
課題 1-2. この動画を見て、報告者の主張についてあなたの自由な感想をかきなさい。
課題 1-3. この動画の報告者と同じような、文化と文化の違いに関するあなたの経験があれば書いてください。

課題 2
この動画の報告者のように、自分の文化と異なる文化に出会ったときに文化人類学者がとる態度があります。それを「文化相対主義」と言います。あなた自身でこの「文化相対主義」について調べ、そのまますの言葉を書いてください。その際に、どの本や論文やサイトから引用したか明記してください。その後、自分の言葉で「文化相対主義」を解釈してください。

**Progressing to the Next Stage in University Remote Teaching
Under COVID-19 Pandemic Conditions:
Challenges faced and met by the College of International Studies,
Spring semester 2020**

NAKAYAMA Noriko^{*1} and OSAWA Hajime^{*2}

*1 Professor, Department of International Studies, College of International Studies, Chubu University

*2 Associate Professor, Department of International Studies, College of International Studies, Chubu University

Abstract

Facing COVID-19 pandemic conditions, the faculty members of Chubu University's College of International Studies (CU-CIS) conducted remote teaching for 15-lesson courses. The lessons were offered almost every Wednesday throughout the spring semester of 2020. Some members introduced useful digital tools such as CoursePower, Zoom, Google Classroom, Dropbox and etc. Others developed original class materials. The faculty members supported each other by sharing their experiences, growing and learning together to overcome the unprecedented challenge. This paper reports on the challenges and outcomes of the experiences of remote learning under COVID-19 pandemic conditions. Noriko NAKAYAMA presents a summary and the content of the courses, and Hajime OSAWA highlights the comments of each faculty member through the team-building experience.

Key words

COVID-19, remote teaching, College of International Studies, challenges, distance learning